
迷宮街の死神

膨れ女

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷宮街の死神

【Nコード】

N9037Z

【作者名】

膨れ女

【あらすじ】

きつい、汚い、危険。あと臭い。これが迷宮探索の現実だ。新人探索者の四割が一ヶ月以内に死亡・失踪する過酷な迷宮街において、探索歴四年のベテランのオレは探索者達から《死神》という不名誉なあだ名を付けられ、恐れられていた。誰もパーティーを組んでくれないぼっちなオレが、ある日一人の少女と出会う。

【活動報告に9話までの用語集があります。ネタバレ有り】

プロローグ（前書き）

自分が読みたい小説を書いてみました。

プロローグ

【アルサライの地下迷宮 第二層】

蔦に覆われた薄暗い部屋の中に男は一人立っていた。

部屋からは二本の通路が延びており、男の隣に置かれているランタンの明かりによって、通路にまで仄かに光が差し込んでいる。男は慎重な面持ちで、片方の通路の先をじっと見据えている。

そうして幾ばくか時間がたった後に、変化は訪れた。

男の視線の先にある通路の空間が、ぐにやり、と曲がる。瞬間、何も無いはずの空間から、三つの白い影が出現した。白い影は次第に四足歩行の獣に形を変えてゆく。

出来上がった三体の獣は、男を食い殺さんがために、隊列を組んで部屋の中へと駆けてゆく。

お次は白い犬ところ三匹か

左手に魔力を集める。

『フォビア、我を恐れよ』

『恐怖』の魔法を三体の白い犬ところ、《ホワイトファング》に唱えた。

白い犬っころの一体が何かに怯えるように足を止めたが、残りの二体は効果がなかったのか部屋の中に我先にと押し寄せてくる。男は右手に持っていた大薙刀を構え、部屋の入り口で獣を待ち構えた。

今だ！

男は体格よりも大きい大薙刀を振りかぶる。大薙刀の刃の部分が、一体の《ホワイトフアング》の頭と体を分離し、吹っ飛んだ《ホワイトフアング》の頭が通路の壁に赤いしみをつくった。

男は大薙刀と共に体を回転させながら、柄についてる金属部分である石突を、今まさに男の頸動脈を噛み切ろうとしていたもう一体の《ホワイトフアング》の脳天に突きつける。

頭蓋骨が碎ける鈍い音が鳴り、辺り一面にさびた鉄のような血の匂いが充満した。

鈍い音を聞いてようやく我に返った最後の《ホワイトフアング》は、目の前で展開される一方的な殺戮に身を固めた。野生の本能が逃げると警告している。

しかし、我に返った白い犬っころが、逃げようとしたのか、襲いかかろうとしたのかは、男には知る機会はなかった。なぜなら、男が発した一筋の『電撃』によって、最後の《ホワイトフアング》は真っ黒に焦げた塊になってしまったからだ。

きつい

汚い

危険

これが迷宮探索者の仕事のすべてだと思う。あと臭いを入れてもいいかな。

オレは白い犬っころたちの皮と牙を死骸から剥ぎ取り、撤退の準備をする。剥ぎ取り箇所以外の部位は、そのうち迷宮に吸収されて消えてしまうので、その場に放置しておいた。

この三匹分の皮と牙の買い取り価格は、大体金貨二枚。およそ十日分の生活費である。四半刻以下の時間で稼げる金額としては、破格とも言える。ただし、それが自分の命を賭けるに値する金額かといえば、正直怪しい。死んだら元も子もないのだ。オレは訳あって、一人で狩っているからこの価格だけで、普通の六人パーティーなら六分の一で、二日分の生活費にもならない。

そもそも、実質四半刻以下の時間で稼げるといえども、そこにいたるまでの準備が長い。武器の手入れから含めた準備期間としては半日相当かかる。いわゆる探索暦四年のベテランのオレがこの程度の収入なのだから、大半の探索者にとって迷宮探索は割りに合

わないはずだ。

とはいっても、今ガイリアあたりでドンパチやってる戦争屋たちに比べれば理想の職場かもしれない。基本的には人を殺さずに済むし、成果に見合った報酬も出る。金さえ溜まれば、引退もできる。ただ、人を殺さずに済むというのは理想論で、時には同業者を殺めなければ、迷宮街で無事に生きてゆけないのも事実、のはずだ。

現にオレは同業者を殺めている。

それこそが、オレがぼっちで迷宮にもぐっている理由の一因なのだろう。決してコミュニケーション能力がないとか、一匹狼を気取りたいとか、そういう理由ではない、と思う。 たぶん、な！

そう。 オレは、「計十人の同業者を殺した」ということで、この迷宮街【聖都アルサライ】における迷宮探索者コミュニティの中で、『死神』、という不名誉なあだ名をつけられていた。『死神』って。

1 五十人中二十人

照りつける太陽は、迷宮の暗がり慣れ切った目にはいくらかまぶし過ぎた。

フード付きのローブを被って、大薙刀を背中に担ぎ、迷宮街を闊歩する。迷宮から出た時刻は昼の刻を一刻ほど過ぎた頃合いだった。

「今日は、一層を攻略するぜ！」

「そうね、そろそろ力も付いてきた頃かしら」

「目指せ一日一金貨だなっ」

うつ向いて歩いているオレの前方から、六人組のパーティーらしき集団が、楽しげに会話をしながら歩いてきた。

彼らの目は希望に満ち、未知の世界と冒険に心は震え、物語の中の英雄に胸を馳せている。

長くはないな、と思った。

五十人中二十人。

一ヶ月のうちに迷宮街に新規参入する探索者のうち、一か月以内に迷宮街で死亡もしくは失踪する人数である。残る三十人の内、二十人は一年を待たず、死亡もしくは引退し、探索者として一年以上生計を立てられるのは、十人がやっとだ。

目の前の若者たち六人は、迷宮に潜りはじめて一週間程度だろう。彼らの目には恐れがなく、彼らには猜疑心が欠け、彼らの胸には

慎重さが足りない。

迷宮で生き残るのに必要なものが全て欠けている。 故に五十人の内の二十人になる。

そんなことを考えていると、向こうの六人がこちらに気づく。彼らの会話から笑いが消え、沈黙が訪れた。

参ったなあ

潜って一週間の新人達も、自分のことは認識しているようだ。オレ「《死神》」という認識が蔓延している現実に対して自嘲げに笑い、うつ向きながら彼らを横切る。 オレは少しの間、彼らの無事を心の中で祈った。

ちなみに潜って一週間の彼らが知っていたのは決して偶然ではない。 彼、すなわち《死神》は迷宮探索者の間で出回っている迷宮街危険人物リストで貫録の危険人物第一位を獲得しているのだ。ぼっちの彼には今のところ知る由も無いが。

アルサライ迷宮管理機構。 通称、【機関】。

迷宮探索者の登録、迷宮における獲得物品の買取、トレーニング施設の運営、住宅・宿泊施設の運営、武具屋などの店舗の運営、冠婚葬祭など迷宮探索に関わる事業を一手に引き受ける機関である。

オレは今、【機関】の本部に来ている。
というのも、今日の迷宮探索の成果を金に替えるためだ。

基本的に本部は、物品の買取と迷宮探索者登録の二つの事務を請け負っている。

迷宮探索者登録が本部で行われるのはともかく、物品の買取が本部で行われる理由は、迷宮探索者の生存確認のため、らしい。例えば、迷宮で手に入れた物を毎日売っていた人間が、ある日突然こなくなるということがあったら、十中八九そいつは死んでいるか、トラブルに巻き込まれている。

基本的に探索者には不干渉の立場を取っている【機関】としては、探索者の内情を探るのはタブーとされている。よって最も効率的に探索者の管理を行うには、冒険者の買取の記録を付けるのが一番というわけだ。

生存確認以外にも、買取の内容によって、探索者がいつ誰と迷宮のどの層でどれだけの間潜っていたかがわかるため、探索者の能力や交友関係、行動パターンを知ることが買取の記録だけで可能となる。

よって、迷宮探索者の登録、管理と同じ場所で買取を行うのはある意味当然といえるだろう。

「え、ええ。か、確認させていただきます。《ホワイトファング》

の牙六つ、か、皮四つ、《オーク》の牙四つ、《ブルーゼラチン》の核九つ、《ポーパルラビット》の爪一つで、よ、よろしいですか？」

恐れ of 籠った声で、買取担当である四十過ぎの中年男性が問いかけてくる。おそらく、《ホワイトファング》の牙と皮の数が同じじゃないのが後ろめたいのだろう。

少し考えて、返事をする。

「《ホワイトファング》の皮は、状態の如何に関わらず買取ではなかったのか？ 確かにこの二つは黒こげだが…」

オレの言葉に、中年男の買い取り担当の目が泳ぎ始めた。

「も、申し訳ありません。せ、先日、ほ、本部の方針で皮類は、じ、状態によっては買取不可ということが、け、決定しまして…」

まあ、皮は衣服などに利用されるだろうから、黒こげではまずいのだろう。無論、黒こげでも使い道がないわけではないだろうが、この前百個近く黒こげの《ホワイトファング》の皮を持ち込んだのが効いたようだ。

迷宮の物品の相場は変動しやすいから、こういうこともあるだろう。

仕方がないから、このまま交渉を進めよう。

「いくらだ」

「は、はい！ その二つの皮も、は、半額で買い取らせていただきます！ よって全部で金貨九と銀貨十五となります！ これで勘

弁してください！」

何か発言の意図を勘違いされているような気がするが、当初提示されるはずの金額よりも損はしてないのでこのまま交渉を進めてしまおう。銀貨十六枚で金貨一枚なので、今回の探索で大体金貨十枚程度の手に入ったことになる。

「あ、ありがとうございます！」

何か言いたそうな買取担当を横目に、金を受け取る。　オレは脅したつもりはないからね？

これ以上ここに用はないので、今日は早めに酒でも飲みに行くかと考えながら、本部の入り口へと向かう。　オレが入り口前にあるエントランスホールに差し掛かったとき、ちょうど一人の新人が本部に足を踏み入れようとしていた。

赤毛の短髪、整った顔立ちに、気品が感じられる凛とした佇まいで、高級そうな鎧に身を纏い、煌びやかな宝飾のある剣を携えて、辺りを見回している。　年は十五、十六だろうか、身長は五尺程度でオレよりも一回り小さい。

またか

どうみても、五十人中の二十人に入りそうな少女がそこにいた。

2 少女と死神

「嬢ちゃん、迷宮街は初めてだろう？」

「ボクに何の用ですか？ ナンパならもう間に合ってますけど」

いきなり出鼻を挫かれた。 流石に嬢ちゃんゝはまずかったか。

このように先行きが不安そうな新人探索者に声をかけるのは、何もこの少女が初めてではない。 親切心、老婆心の類で、一ヶ月も迷宮街で生きられそうにない探索者に、発作的に声をかけてしまうことがこれまで幾度かあった。 その海のように深い親切心がこの少女には、スケベ心だと解釈されてしまったらしい。 スケベ心なんて少ししかないからな。

「い、いや、そうではなくて、だな。 迷宮探索者志望の君に忠告しようと思ってだな」

「なんですか？」

怪訝そうな目でこっちを見ている。

こういう目で見られるのはしょっちゅうだが、ナンパの類だと思われるのは癪だ。

紳士的かつスマートさを心がけて、少女に忠告する。

「このまま探索者になっても、君は一ヶ月この迷宮街で無事には過ごせないだろう」

今まで同じように忠告して、死んでいった探索者たちの姿が脳裏によみがえる。

オレが忠告したところで、彼らの死の運命は大して変わらなかった。

そして、恐らく今回も、この少女が行き着く先は変わらないだろう。

この行為が自己満足であることは重々認識しているのだ。

「……………犯罪予告？」

なぜか変な方向に解釈されてしまった。

どうしてこうなった。

あわてて、修正を入れる。

「そ、そんなつもりはないぞ。オレが言いたいのは、君は迷宮に潜るには力不足ということだ」

だから潜るな、とは言えない。

十五、十六の少女が一人で迷宮街を訪れ、迷宮に潜ろうと決意しているのだ。

潜らなきゃいけない、彼女なりの理由があるのだろう。

最初からわかっていたことだが、こんな忠告は無駄なのだ。忠告を受け入れて、じゃあ探索者やめます、みたいな人間はハナから

この街には来ない。死のうと思ってこの迷宮街に訪れる人間はいない。探索者としての素質があるうがなかるうが、迷宮街を訪れる人間は必ず迷宮に潜る。その結果、死んだり生き残ったりするだけだ。

これ以上話しても、この少女の死を知ったときの悲しみが増すだけだと思い、この場を立ち去ろうとした。だが、少女は真っ直ぐオレの目を見据えて、こう言い放った。

「じゃあ、どうすればいいですか？」

少女は何の含みも無いような透き通る目をしていた。吸い込まれるような茶色の瞳から、オレは目を逸らすことができなかった。彼女の疑問も最もだ。偉そうに忠告するからには、オレは何か答えを持ってなきゃいけなかったのかもしれない。

でも、答えはない。迷宮街にいる以上、絶対的な安全はどこにもない。

どうすればいいのか、それが分かれば迷宮街で死ぬ人間などいないのだ。

オレは苦し紛れに言葉を紡ぎだす。

「……………迷宮に潜らなきゃいい。迷宮に潜る以上、常に死の危険がそばにある。どんなに万全を尽くしても、必ず死はどこかにある。決して死なない迷宮の潜り方なんて存在しない。……………だが……………いや、そうだな……………。もし、金銭が許すのなら、可能な限り迷宮に潜る前に、トレーニング施設でトレーニングに励むべきだ。そうすること

で死ぬ確率を極限まで薄めることは可能……かもしれない。……でも……それでも、死ぬときには死ぬ」

ひどいアドバイスがあつたものだ。

でもこれが、四年間オレが見てきた迷宮街の真実だ。

少女は困つたような顔をした後、少し考えて、笑いながら答えた。

「それならボクはこれから一ヶ月迷宮に行かずにトレーニング施設にだけ行きます。」

これで貴方の死刑宣告も大外れですね」

彼女はオレの言葉を聞き、何かを感じ入つたようで、オレに笑顔を振りまいてくる。

彼女の笑顔が、すさんだ迷宮街の生活を送っていたオレには少しばかり眩し過ぎる。

突き放さなくては、と思つた。

でないと彼女は、長く生きられない。

「あと、もう一つ忠告しようか」

「なんですか？」

今度は笑顔でこちらを見ている。

これからオレは彼女を突き放すのだ。

少女の笑顔が、少し辛い。

「あまり人の言葉を信用しないほうがいい。この迷宮街で人を信じたら、食い物にされる。さしずめ君なら慰み者にされるか、売り飛ばされるかがオチだ。そして」

「で、でも、貴方の忠告は」

少女はオレの言わんとしていることが分かるのか、オレの弁護をしようとし始めた。

やはり、この少女は迷宮街には向いていない。迷宮街で生活するには純粹すぎる。

オレは少女の言葉をさえぎって、こう言い放った。

「そして、オレは迷宮街で最も信用してはいけない人間だ。」

《死神》と呼ばれている

そう続けて、オレはその場を逃げるように去った。

このあと、オレは酒場で一人手酌をしながら、最後の《死神》の部分はないわー、と悶々とすることになる。

今年で二十一になる男が言う台詞ではない、恥ずかしすぎる。しかも年下の女の子に向かって。

誰か、オレを殺してくれ。

ころしてくれー。

いやいや、ちょっと待て。

オレは事実を言ったまでだ。

悪いのは《死神》なんていうあだ名だ。

こんなあだ名をつけた奴が悪いんだ。

よしそいつを殺そう。

ころそう。

酒場の隅のほうで一人酒をあおりながら、「ころしてしてくれー」
とか「ころそう」とか呟いていた《死神》の傍には、誰も近づかな
かったという。

3 少女エリー

〈迷宮街危険人物リスト〉 彼らとはパーティを組んではいけない！

第1位 トシアキ、通称《死神》

危険度 +

出会ったら、死刑宣告されないことを祈れ！

特徴：見たまんま死神スタイル

血で汚れたフードの付いたローブを被り、死神の大鎌らしき武器を持っている

〈伝説の数々〉

・6人パーティで彼と迷宮に潜ったら、5人が死んで彼1人だけが迷宮の『三層』から戻ってきた。

・「そんな危険なわけがない」といって彼と組んだベテラン5人が一日後死体で戻ってきた。

・迷宮街に初めてきた新人が、「一ヶ月後に死ぬ」と死刑宣告を受けた

・新人探索者の1/3が死刑宣告経験者。その的中率の高さから、そもそも死にやすい「女、子どもほど危ない」

・買取担当者が彼に脅されるのは日常茶飯事

・彼が俯いて笑うのを聞いた日に、迷宮で怪我をする確率が150%。一度怪我をして、さらに怪我をするのが50%の意味。

・彼が探索した辺りに、《ホワイトファンク》が百体以上真つ黒焦げになって倒れていた

・四層極悪モンスターの《スライム》が彼と出会って数分で死んだ
・彼が一日に稼ぐ金貨の量は平均20枚。多い日は100枚も。

・迷宮における死亡者は一ヶ月平均30人、うち約20人が彼による何らかの被害者。

「やっぱり、これって昼間に会った人だよね…」

宿屋の部屋で、赤毛の少女エリーはため息をつく。

手元には、探索初心者マニユアル。迷宮街危険人物リストのページにある写真をじっと見ていた。

このマニユアルは先ほど食事を取っていた食堂で、一人の先輩探索者からいただいたものだ。

内容は突っ込みどころ満載で、正直いろいろと疑わしい部分もあるけれど。

（特に「何らか」の被害者って何ですか！？「何らか」って！）

昼間に《死神》さんに死刑宣告された事実を、先輩探索者たちに告げると一同に同情をされた。

このマニユアルを見ても、あの人がいかに有名だったのかがわかる。

血の付いた武器を背にフードを被っている姿は、不審者そのものだったし、目立つのは確かだ。

「悪い人には思えなかったけど…」

《死神》さんの忠告通り、ボクは明日から訓練所デビューをすることになった。

女性だけのパーティを組んでいる先輩探索者たちのグループ「アマゾネス」に勧誘を受け、将来的にパーティに参加する代わりに、特訓をしてもらうことが決まったのだ。

一ヶ月特訓したい、といったら驚かれたけど（普通特訓は二、三日らしいよ！）

《死神》さんの死刑宣告の話をしたら、あっさり了承してもらえた。

どうやら、「アマゾネス」の過去のメンバーにも死刑宣告をされた人がいたらしく、しかも本当にちょうど一ヶ月後に迷宮で罠にかかって亡くなってしまったらしい。それからというもの、《死神》さんは「アマゾネス」のグループの中で、畏怖の対象になっているようだった。

「早く強くならないと…」

ごろん、とベッドに横になって、エリーは呟く。
今は無き故郷に、思いを馳せる。

追っ手が来るのはいつになるだろうか。
それまでに、自分の身を守り、生き抜く手段を得なくてはならない。

（そのためにボクはこの忌々しい聖都に来たんだ！）

手持ちが残りわずかになって、いる財布を見てため息をつく。
この都市に来るまでに、大半を使ってしまった。
この額だけで、一ヶ月も生活してゆけるのか、わからない。

「お金がこんなに大切だなんて、知らなかったよ……」

いざとなったら、宝飾の付いた剣を売って生活費の足しにしないではない。

自分と王家を繋ぐ証でもあるから、そう簡単には手放したくはないけど、背に腹はかえられない。

目が潤んで、目の前の天井がぼやけてくる。

ここのところ泣いてばっかだ。

泣いた分だけ、自分がどんどん弱くなる気がするので、必死に涙をこらえる。

「ぐすつ……明日は早いんだ。早く寝よう」

エリザベッタ「ナデイン。」

ガイリア半島の今は亡き国家、【イピロニア】の第三王女。

それが彼女の正体である。

4 二大宗教（前書き）

世界観の説明回です

4 二大宗教

ユタ教とムハマド教。

かたや東側諸国の国教、かたや西側諸国の国教。この二大宗教における最大の不幸は、同一の聖地を持っていることだった。

そして、この不幸が本格的にガイリア半島に襲いかかったきっかけは、今から三十年前に聖地で起きた事件。

【聖都アルサライ】における迷宮の出現

原因は三十年間、多くの学者、知識人、占い師、呪術師もろもろが、あーだこーだ言い合っているが、未だ共通認識は作られていない。

ただ 事件 が起きる舞台としては、聖地はどこよりも相応しかったのかもしれない。 と、宗教家は言っていたりする。

そもそも、【聖都アルサライ】は地理的には東側諸国に属していた。 しかし、聖都は宗教的な理由から東側諸国のどの国にも属さず、政治的干渉を受けない中立都市として存在していた。

よって長年にわたり、【聖都アルサライ】は東側諸国からのユタ教の信者の巡礼だけでなく、西側諸国のムハマド教の巡礼も等しく受け入れる国際都市として栄え続けていた。

三十年前、迷宮が出現するまでは。

迷宮が出現して一月も立たないうちに、迷宮から異形の怪物たちが出現。怪物たちは未知の術を用い、無差別に市民と巡礼者を攻撃し、多くの死を聖都にもたらした。

半年後、迷宮の怪物により、自らの国の安全までも脅かされ始めていると認識した東側諸国は、連合軍を聖都に派遣し、多くの犠牲を出しながらも怪物を迷宮内部に押しとどめることに成功。その過程で聖都における東側諸国の影響力は増していった。

問題はここから。

怪物が操る未知の術、魔法、が歴史の大きな転換点を生み出すことになる。多くの犠牲と研究と一部の人たちの妄想によって、魔法に関して次の三つの事実（？）が判明した。ちなみに妄想の占める割合は六割以上。ほぼ妄想じゃねーか。

怪物は迷宮が生み出す魔力によって生まれ、体内に蓄えた魔力を用いて魔法を行使しているということ（全て妄想）

魔力が充満している聖都（妄想）においては、人間も魔法を利用することが可能（事実！）であること

怪物が死ぬと多くの魔力は怪物の死骸とともに消失するが、怪物の死骸の一部に残りの魔力が濃縮され（ここまで妄想）、消失せずにマジックアイテムとして残ること（事実！）

このマジックアイテムはどれも、既存の技術の枠組みを超えた性能を持っていた。

一部の希少なマジックアイテムは同質量の金よりも高い額で取引され、マジックアイテムは東側諸国に莫大な利益を与えることになる。

まさに 魔力革命 であった。 と、一部の人たちは言っている。

この事態が、西側諸国にとっては面白いはずがない。

彼らにとってみれば、聖都における迷宮の出現と魔力の存在は、自国のムハマド教の神の奇跡に他ならない。 故に、ムハマド教の神がもたらした利益を異教徒ユタ教の集団が手にしている、ってことになる。

迷宮が出現してから一年後、西側諸国の大国【フランス王国】のムハマド教会は【聖地アルサライ】の奪還を宣言。

ムハマド教正規軍、通称クルキアータが聖都に向けて進軍を開始した。

クルキアータ戦争 の始まりである。

そしてこの戦争で最も被害を受けたのが、東側諸国と西側諸国の中継地点。 ガイリア半島であった。

大義名分を持った人間ほど恐ろしい生き物はいないと言ったのは誰だっただろうか。

ムハマド教正規軍クルキータがガイリア半島で行った所業は、まさに悲惨。

殺戮、略奪、強姦、人間が行えるありとあらゆる非道が行われ、難民と戦争孤児が、東側諸国にあふれ返った。

以後三十年間、迷宮の怪物によって流された血のおよそ百倍がガイリア半島に流れ、その結果多くの小国が滅亡した。その中には赤毛の少女エリーの祖国【イピロニア】も含まれている。

それでも、迷宮街には、彼女の身の上を真に同情するものは恐らくいないだろう。彼女は戦争による多くの被害者のうちのたった一人に過ぎないのだ。

現在、迷宮街となった聖都における迷宮探索者の大半が、この戦争の何らかの被害者であった。

そして、勿論というかなんというか、我らが《死神》トシアキも例に漏れず、クルキータ戦争の被害者だった。

トシアキが物心付いたときには親は既に無く、多くの戦争孤児に囲まれて生活していた。

5 先生

もう月末か

線香の香りが街中を埋め尽くす。この香りに慣れてしまったのは、いつだったか。

大通りに面した広場で行われている【機関】主催の迷宮街合同葬儀を横目に、オレは時間が経つのを待っていた。

今日の《死神》は相変わらずフード付きローブは被っているが、いつものように大薙刀を携えてはいない。迷宮に潜る予定はなかった。

手元の懐中時計が、昼の刻を告げようとしている。そろそろだな、と思った。

「トシアキさん。お久しぶりなあ」

白髪混じりの老女が、ゆっくりとした足取りでこちらに近づいてくる。

「一ヶ月ぶりですね。ミリア先生」

オレは深くお辞儀をした。

「ご無事で何よりですよ。いくら稼いでも死んでもうたら元も子もねえもんで。トシアキさんはあの子らの希望じゃけえ」

「彼らは元気ですか」

「いや、もう元気いっぱい手で手に負えんありさまじゃ。あの子らを

見ると若い頃のウパさんとトシアキさんを思い出してしもうて。
ほんま、時間が経つのは早いのう。もう三年になるかいの」

「ええ……」

オレは顔をうつ向ける。

「ウパさんも、ローザさんも、タクさんも、ジョセフさんもハナさんもワシなんかよりも先に逝ってしもうて、ワシはほんまに何をしとるのかいのお……」

初老の女性の顔が歪む。

「ミリア先生は、あの子達にとって必要な人です。なかなかできることではありません」

「トシアキさんも、もう十分じゃ。みんな逝ってしもうたのに頑張ることはあらへん。そろそろ解放されてもええ頃合いじゃ」

「そんなことはできません。…ウパたちの死の責任は私にあるのですから。それに私が稼がずして、誰が孤児院を支えられるんですか。迷宮への出稼ぎは、私で最後にしましょう」

そう言つて金貨の詰まつた袋を渡す。

「一月分です。重いので気を付けてください。…それにまだ戦争は続いています。不幸になる子は増えることはあつても、減ることはありません。そのためには必要なことです」

「ほんまにのう。ほんまにトシアキさんは、【安らぎの家】の誇りですじゃ。こんなに長い間、こんな大金を稼いだ子は前にも後にもあらせん。トシアキさんなら、くたばることもあるまいと信じておるで。それに、あの世の皆が見守つてくださっておるでよ」

ミリア先生はオレの手を握る。子供の頃から知っている懐かし

い温かさだった。

オレの唯一の故郷、【安らぎの家】。

元修道女であるミリア先生と、腕自慢の大人数人が二十年近く前に設立した戦争孤児のための孤児院である。

当初の【安らぎの家】では、ミリア先生が一人で子供の世話を担当し、孤児院の運営費用は腕自慢による迷宮街での出稼ぎで賄われていた。そんな中で幸運にもオレを含む子どもたちは、愛情を与えられて育つことができた。

だが孤児のために出稼ぎにきた心優しい腕自慢を、迷宮が飲み込むのに長い年月はかからなかった。

そして、資金難によって孤児院の存続が危ぶまれた際に、愛情を受けて育った子供たちが迷宮街へ出稼ぎに行くのは自然な流れであった。

最初に迷宮街に出稼ぎにいった子供たちは、オレよりも十近くも年上だった。半年も立たず、次の子供たちが出稼ぎに行くことになった。そして五度目の出稼ぎ隊として、オレたちが迷宮街に足を踏み入れたのは、もう四年前になる。

「ミリア先生、そろそろお時間でしゅう」

ミリア先生は長年にわたって月の最後に、孤児院の運営費を手に入れるために迷宮街にきていた。迷宮街へ物資を運ぶ、護衛付きの行商団と共に。

物資供給の行商団がお馴染みの商談をまとめるのには、そこまで

時間はかからない。 よって、このように会って早々切り上げてしまうのが常だった。

迷宮街は大金を持って長居する場所でもないか

名残惜しさを隠して、オレは一月の別れを告げる。

「もう、そんな時間かの。ではトシアキさん、お体に気を付けてくだされ。あと、あの子らもトシアキさんに会いたがっておるで。暇が許すなら一度戻ってきんさい」

「ええ。ミリア先生もお大事に」

去ってゆく先生の背中が小さく見える。

線香の匂いが目に染みた。

5 先生（後書き）

ヒロイン（老女）

6 定食屋

ミリア先生を送り出したあと、オレは腹が減ってるのに気付き、行きつけの定食屋に足を伸ばした。ボリユーム満点な料理がリーズナブルな値段で提供され、むさい探索者にはおあつらえ向きの店である。

「イラッシャーイ」

定食屋に入ると、東部訛りの店員がやってきた。

「アノ、すみませんが、アイセキ、ヨロシカ？」

アイセキ？ あいせき、愛惜、哀惜：えーと、ああ相席か。

周りを見渡すと、混雑して満席に近いのがわかった。そういえば、安息日の真っ昼間だった、と混雑の理由を推測する。

普段は迷宮を出て諸々を終えたあと、大体昼の刻から二刻ほど回った頃に来ているので、こんなに混んでいる定食屋を見るのは久しぶりだった。

「ええ、いいですよ。日替わり定食で」

あんまり混雑してるのは苦手だが、もうすでにこの定食屋で食う気分だったので仕方ない。いつものように日替わり定食を頼む。ボリユーム満点で銅貨4枚だから、非常に安くて気に入っている。

「アイヤー。分かったヨー。席こつちネー」

店員に誘導され、席に向かう。

「あ」

「え」

そこには、赤毛の少女がいた。
オレが今一番合わせたくない顔だった。

しばらく立ち尽くし、目で少女と会話を試みる。

どうしてここにいるんだ。この店は、年頃の女の子が一人でくるような店じゃねーぞ、と。

無言のアイコンタクトを見た店員が何を思ったのか

「アイヤー、お客さんタチ、恋人同士カー。ナラ丁度いいネ、料理シバラク時間かかるカラ、ゆっくりスルヨロシ」
とか言い出しやがった。

恋人才？ おい、誰かこの店員の息の根を止めて黙らせる。誰でもいい、はやく。

おい、そのオッサン。背中の戦斧でヤツの脳天をかち割ってくれ。くそつ。あからさまに目反らしたぞこのオッサン。

つか周りも、この子に同情の視線を集めるのやめろ。オレは悪くないぞ。

てなことを考えてるうちに

「お、お久しぶりです。《死神》さん」
と少女が沈黙を破った。

空気が変わるのはいいけど、やめて。そのあだ名でオレを呼ぶのだけはやめて。

最近、ようやく

《死神》と呼ばれている（キリッ

の場面が夢に出なくなってきたんだから。

「一週間ぶりか？」

あの忌々しい場面からな！

「はいっ。あのあと、ちゃんと毎日訓練してるんです。《死神》さんの助言どおり」

だから、ほんとにその《死神》って呼ぶのやめて。……あ、そうか。そっぴやこの子、オレの名前知らないのか。

「トシアキ」

「えっ」

「オレの名前はトシアキだ」

「えと、ボクの名前はエリーです」

えへへ、と少女ははにかむ。可愛い。

…じゃなくて、そういうことじゃねーだろ。
バカなの？ アホなの？ アホの子なの？

このまま、「ご趣味は？」とか聞く流れみたいになってるじゃねーか。

「う、そうか…。ではなくてだな。なんだ。…訓練は上手くいってるのか？」

「はいっ。カリーナさんに魔法を教わっているところで、簡単な魔法なら使えるようになったんです。えっと、カリーナさんってのは「アマゾネス」ってグループの魔術師で、ボクは一カ月後「アマゾネス」にお世話になることになっていて。それは《死神》さんの助言に従ったんですけど。それで、ああえっと、クーネさんと《死神》さんは仲が悪いんです。あ、そのクーネさんってのは「アマゾネス」のリーダーで。そういうリーダーからは絶対に《死神》さんに近づくなって」

少女の怒涛のトーク。

「落ち着け」

オレは少女を諷めた。

というか、この子また《死神》っていったよね？ しかも三回。
オレちゃんと名乗ったのにね。

しかし、「アマゾネス」のリーダーねえ。

そういや会った時に「あんたなんて怖くないんだからねっ」てな感じで挑発してくる黒髪ロングの女がいたな、アイツか。一向にデレる気配はなかったが、照れ隠しであるというわずかな可能性が、

今完全に消えたな。

とか考えていると、

「ごめんなさい、緊張しちゃって。こうやって対面してると何だか照れますね」

とか言い出すし。

ほんと何言ってるのこの子。

おい、その水はこんでいる定員。なんか変な空気になってるぞ。お前のせいだからな。あと早く飯もってこい。

「それにしても、飯まだかな。君もオレと長い間一緒にいるのはまずいだろ。オレも信用するなと言った手前、長々と話すというのも……」

「あつ。そのことなんですけど」

おずおずと少女は口を開く。

「保留ってことでいいですか、信用するなっの」

「は？」

思っていたことがそのまま口に出てしまった。

「えっと、助言してもらったし。右も左もわからない状態で助けてもらったというか……。《死神》さんのことよく知らないのに悪く言うのも、おかしいと思いますし。あ、そうだ……」

信用するな、ってのを信用しないってことでどうでしょう？

開いた口がふさがらない。

何この子上手いこと言っただみたいな顔してるの。

アホの子だ。 完全に今オレの中で第一級アホの子認定が済んだぞ、おい。

7 最も過酷な戦い

肉、肉、野菜、油、野菜、肉、油、肉、肉。

底がみえない。

オレはなぜか、日替わり定食ではなく、この定食屋で最強と名高い《スペシャル丼》に挑んでいた。

圧倒的な量の暴力に、心が折れかけている。

迷宮街で最も過酷と呼ばれる戦いに挑んでいた。

「《死神》さん。もうそろそろ半分だよっ」

アホの子が何か言ってる。

元はといえばお前のせいだからな。

ボクもお腹いっぱいになってきちゃったー、とかいいながら涼しげな表情でオレの日替わり定食を食べているアホの子には目もくれず、オレはひたすら目の前の《スペシャル丼》という魔物との戦いに明け暮れる。 限界の時は近い。

大体何があったか想像は付くだろうが、事の発端は数分前にさかのぼる。

オレがこの目の前のアホの子に、「こんな定食屋、女の子が一人で来るような場所じゃないだろう」と尋ねたところから、思い出すことにしよう。

「ボクができるだけ食費を浮かせたいって言ったら、カーリーナさんが、いい場所があるよって。今日ボクは朝昼晩兼用でここに来てる

んです」

へへん、と自慢するようにアホの子は答えた。

一ヶ月無収入は厳しいんだろうなー、と他人事のように考えたオレは「そうだな。ここなら銅貨数枚でたらふく食えるからな」と返答する。

「そうみたいですなー、銀貨一枚でたくさん食べられるみたいで、
『銀貨一枚ので』って注文して」

「えっ」

「えっ」

話がかみ合わない。銀貨一枚……だと……

確かに、普通の店で腹いっぱい食べるには銀貨一枚程度は軽くかかる場合が殆どだ。ただ、銅貨数枚で十分に食えるこの定食屋で銀貨一枚といった額は、途方も無い大金に値する。そして、この定食屋でそんな大金に相当するメニューが、ただ一つだけ存在した。

その名も《スペシャル丼》。

五十人中四十人。

この定食屋で《スペシャル丼》を頼む探索者のうち、半分以上食べる前に力尽きる人数である。残る十人の内、九人はどんぶりの底を見ることなく、死亡もしくは引退し、完食者として定食屋の歴史に名を連ねるのは、一人がやっとだ。

どうみても、五十人中の四十人に入りそうなアホの子が目の前にいた。

「だって、カリナさんが、銀貨一枚あれば食べるのには困らないって……言ってる……た……」

アホの子は言い終わる前に、事の重大さに気づいたようだ。それもそのはず、目の前の店員が例のモノを運んでこうとしていた。

病的なまでに膨張した容器に、名状しがたき肉と野菜が冒瀆的な量入っている忌まわしき丼。

目の前の少女は慄然たる思いで地獄の死者たる店員が持つその異形の物体を凝視し、青白い狂気じみた顔で宇宙的な深淵に晒されることを理解しようとしていた。

アホのこが、なみだめでこっちをみている
助けますか > はい

いいえ

オレのと交換してやろうか？

この一言を今オレは激しく後悔していた。

「そもそも……、君に勧めた奴は……なぜここに……いない……」

息も絶え絶えに、アホの子に尋ねる。

何か喋っていないと、思考が肉と野菜と油に覆われかかなかった。

「ええっと、「アマゾネス」のみんなは昼から迷宮にいつてるんです。朝はボクのトレーニングに付き合ってもらって、昼から別行動なので……って大丈夫ですか？ 顔色が……」

上目づかいでオレを見る。　そういう顔はちよつと卑怯だろ。

「まだ……まだだ……、まだいけ……ぐふう」

圧倒的な量の暴力によって、迷宮街屈指の探索者の命が、今尽きた。

現実是非情だ。

「あわわわわ、えつと水を、《死神》さん、これ水ですっ」

目の前が真っ暗になる。《死神》さああああん、と叫ぶ声が聞こえたような気がした。

という、オレの心象風景はともかく、案の定というかなんと言いか、オレは《スペシャル丼》を食べきれぬわけもなく、丼の半分を胃に入れた頃にギブアップした。勿論、実際のやりとりが、もっと淡々と行われたのは言うまでもない。現実の認識が過剰になっってしまったのも、ひとえに《スペシャル丼》の量の暴力のせいである。

「すみませんっ、《死神》さんに迷惑をかけてしまっつて」

「ああ、いいよ。おかげで一杯食べたしな」
しばらくは、食い物を見たくないけど。

「あ、そうだ。お金、私が全部払いますからっ。せめてものお詫びに」

「いや、食べた量的にはオレのほうが多く払うべきなんじゃ…」

「いえついいんです。ホント迷惑かけちゃって」

「いやいや」

「いえいえ」

というやり取りが数度あった後、結局少女に押し切られてしまった。

「じゃあこうしましょう。今日は迷惑代もあわせてボクが全部払うので、次の機会は《死神》さんが払ってください」

なぜか、少女の頭の中では次の機会があることになっていた。気にしたら負けだと思ったので、触れないでおこう。

「ああ」

「今日は楽しかったです。また一緒に食事しましょうね」

食堂を出て、それじゃあ、と別れをつける。
少女もオレに続く。

「そうですか。ボクもトレーニングに戻りますね」

ああ、と小さく頷く。

「そうだ。いつか、ボクの訓練の成果を見てくれるとうれしいです」

そういえば、一週間前からトレーニング場に近づかないようにしていたことを思い出す。 普段通りの生活をしていたら、少女とトレーニング場で会うこともあるだろう。

「わかった、またな」と踵を返し、オレは逃げるように人ごみにまぎれる。

街に線香の匂いはもうなかった。

8 アマゾネスの女

「アマゾネス」のリーダー、クーネ。

故郷はガイリア半島の小国「フェイタン」。

武と重んじる国家の、剣術道場の一人娘として生まれた彼女は、多くの門下生と両親、特に師匠である父親に限りない愛情を注がれ、すくすくと育っていた。十五になる頃には、彼女は自分の容姿が端麗で、また愛情を受けてそだったことによる活発さから、周囲の男性から言い寄られており、自分はもてる側の人間なのだという意識をもつようになる。彼女は厳格であるが優しい父の姿を知っていた。ゆえに、どうしても周りの言い寄ってくる男たちが頼りなく、物足りないと感じていた。飽食状態でいつでも可能な恋愛には彼女はそれほど興味を持たず、ただ父の背中を追いかけて、修行に励む毎日を送っていた。

北の村が山賊に襲われた、という噂を聞いたのは、十八の冬のことであった。国内で有数の剣術道場であった彼女の実家からは、師範である父と実力のある門下生たちによる討伐隊が組まれることとなった。実力という点では彼女は討伐隊に参加するのに申し分はなかったが、討伐者という名の人殺しの名を十八の娘に背負わせるのを厭った彼女の父親は、彼女を道場に残すことにした。その判断が、正しかったことを父は死の直前に理解することとなる。

全滅、という事実が確定したのは、討伐隊が出発してから三日後のことだった。全滅の事実、剣術道場のある城下街が、侵略者の手によって火の海に包まれることで判明することとなった。全滅の原因は、討伐隊が大きな勘違いをしていたことにある。

そもそも戦っていたのは、数十名の山賊ではなく、千人の組織された兵隊であった。整列した千の重装歩兵による槍の突撃に対しては、研鑽された剣の腕も役には立たず、ただ一方的に潰された。

侵略者の群れが城下街に姿を現した頃、彼女の母はクーネを剣術道場の地下にある石畳の空間へと連れてゆき、ここに身を隠すようにと諭した。身体がほとんど動かせない狭い空間で、無限にも感じる長い時間を彼女は震えながら過ごす。

悲鳴と狂騒が止んで、彼女が外に出て初めて見たものは、変わり果てた母の亡骸であった。母親の服とその下の皮膚はびりびりに切り刻まれており、腹部と首筋は赤く染まっていた。そして、母のありとあらゆる穴が、犯されていた。

体中のすべての水分を吐瀉しながら、彼女は街を徘徊した。そこらじゅうに置かれている白くぶよぶよとした物体が、元人間だと気づくのに時間はかからなかった。そして、全ての若い女だった物に犯された痕跡があるのを見つけるにつれて、一人生き残ってしまったという絶望が、男という愚かな生き物に対する怒りに変わっていった。

しばらくして、城下街の一角で、彼女は自分よりも若い少年が死姦を行っているのを発見する。彼女は、少年が街の生き残りか侵略者の残党かを判断する前に、近くに落ちていた折れた剣を少年の喉元に突き立てた。愛情を受けて育った彼女にとって、初めて人を殺める経験であった。

半月後、寄る術を持たないクーネは、迷宮街で生活することとなる。彼女は男を蔑み、憎み、そして恐れていた。彼女が女性だけのパーティを結成したのは当然の成り行きであった。

彼女は特に美しい女性とパーティを組むのを好み、そして下卑た男性探索者から、仲間の身の安全を守ることを最優先に行動した。

その行き過ぎとも言える庇護から、一度組んだパーティと決別することもしばしばあったが、身体の純潔を守りたいと考える女性探索者にとって、長年の鍛錬による剣の腕を持つクーネは最も頼りになる存在となる。

迷宮街に身を寄せてから半年が立つ頃には、清らかで麗しい女性集団のグループが彼女を中心にできあがっていた。迷宮街の人々は、神話になぞらえて、麗しい女性だけの部族を意味する「アマゾネス」の名を彼女のグループに与えることとなる。

そんなクーネの、今一番の懸念は《死神》の存在であった。

彼女が《死神》の存在を知ったのは、今は亡きパーティの一員、ナナを勧誘したときだった。

ナナは存在感すらあやふやな儚げな美少女であった。出会った瞬間クーネの庇護欲が撥られ、パーティに誘うに至ったのは当然の流れだった。

そんなナナが、クーネに誘われて最初につぶやいた言葉が、「私はたぶん探索者に向いてないんだと思います」であった。詳しく聞くと、ある男が彼女に、探索者になっても一月も生きられない、

と言ったということだった。

この事実にはクーネは激しく混乱した。

クーネが知っている男性探索者の像は、何も分からない女性をパ
ーティに誘って無理やり手籠めにするか、騙して性奴隷として売り
払うといった類のものである。

よって、クーネにはナナに死刑宣告をした男の意図がまるで理解
できなかった。

しばらく考え続け、苦し紛れにクーネは、男が一月以内にナナを
襲うという宣言をした、と理解した。

それから一月の間、クーネはナナの付近を見回り、男の接近に神
経を張り巡らせた。

しかし、男の気配は全くなかった。

事が起きたのは、死刑宣告の一月が終わる日のことだった。ク

ーネはいつも以上に周囲に神経を尖らせて男の襲撃に備えていた。

迷宮にもぐる際、クーネは男が襲って来るはずの前方と後方に全
注意を向けた。

そんなクーネがふとナナの行為を見逃したのは、仕方の無いこと
だったのかもしれない。ナナは魔物が残したと思われる初歩的な
毒針の罠に、自ら飛び込んでいた。

数多くの死に触れてきたクーネにとっても、ナナの死は衝撃的な
出来事であった。

そして、単に死の予言だけを行った男《死神》に対して心底怯え
た。

今までのクーネにとって、男というものはある意味で分かりやす

く、そのあまりに分かりやすい悪意に恐怖するだけだった。

その分かりやすさが《死神》には通用しない。それが恐ろしい。

いつしか《死神》のことが理解できない、が、《死神》のことを知りたいに変わっていった。

彼女は《死神》に出会う度に、彼女が思いつく限りの悪意をもった挑発を行った。

クーネは《死神》が、反発という分かりやすさを表現してくれることを期待した。しかし、《死神》は所在ないように笑うだけであつた。

どんどん《死神》に対する混乱が広がっていった。

そんな中、第二のナナともいうべき少女が自分のパーティに加わる事となった。

ナナと同じように、《死神》に死刑宣告された少女、エリーである。

エリーは、パーティに加わるや否や、《死神》のことを信頼するような素振りをみせた。《死神》の助言に従いたい、とエリーは言った。

《死神》を理解したいという気持ちが強かったクーネは、すぐにこの申し出を受け取った。もし《死神》の助言に従ったらどうなるかに興味があつた。

午前はエリーを特訓し、午後はエリーを抜いたパーティで迷宮にもぐり、夕方エリーと合流する。そんな毎日を過ごしていたある

日、迷宮から戻ると、訓練に取り組むエリーのそばには《死神》がいた。

まるで、エリーを見守るように立っていた《死神》の目に、クエは既視感を覚えた。

自らの二十年間の人生を必死に思い出そうとする。

しばらく考えて、ようやく《死神》に対する混乱の理由が判明した。

あの目は、討伐隊に参加するのを是としない、慈愛に満ちた父の目と同じだと。

8 アマゾネスの女（後書き）

ようやく、書きたかった内容へと少しずつ近づいています

9 腹筋、腕立て、魔法

オレが迷宮帰りにトレーニング場に寄って、アホの子エリーの魔法の練習をぼーっとみるのが日課になって、幾日か経ったある日のこと。まあ、ぼーっとみる、といっても、自分のトレーニングを行いなから、だけど。

よし、と少女は気合いを入れて、前を向いて呪文を唱える。

『ヘデラ、汝を覆い隠せっ』

エリーの前方にある、四尺はある藁人形の足元から『蔦』が生え、藁人形の半分を覆い隠した。

「やった、できましたっ、《死神》さん！」

オレは不安定な足場の上で、片足でバランスをとる訓練をしていたが、それでも返事くらいはできる。

「良かったな。じゃあ次は腹筋と腕立てを三十回やった直後に、もう一回だ」

オレは口でエリーに次の指示を出す。

「えー、成功したんだから、ちゃんと褒めてくださいよー。言われたとおりやりますけど……」

「疲れて集中が切れてるときに成功させてから、はじめて成功したと言え。褒めるのはその後だ」

むー、と言いながら、エリーは腹筋に取り組む。　しかし、表情がコロコロと変わるヤツだな。

ちなみにこの特訓メニューはオレが考案した独自のメニューである。

魔法が本当に必要な状況は平時ではない。　迷宮を駆けずり回って、くたくたになったときにこそ魔法は必要になるのだ。

よって、その状況を擬似的に作り出すのがこの特訓の主旨である。それに加えて、魔法使いであっても、基礎筋力がある程度無くては話にならない、というのがオレの持論だった。

一人で全てのことをやらざるを得ないオレだからこそ出る発想で、迷宮探索者の一般的な常識とはずれているかもしれないが。

「それにしても……くっ……《死神》さんの教えてくれる……うっ……魔法って……独特ですよ……ねっ」

腹筋しながら、アホの子エリーは問いかける。　もう息が上がってるのか、体力ねえなあ、おい。

「この『鳶』の魔法は前衛無しで戦う為に覚えたものだからな。確かに前衛二の六人パーティなら、足止めなんぞ有り難みは薄いかもしれない。ま、覚えておけば前衛が倒れても、君は死なずに逃げられるかもしれないぞ」

搦め手を可能な限り用意する。　これが迷宮で生き残るコツだ、とオレは考えている。

腹筋と腕立てを終えた少女は、はあはあと肩で息をしながら、立ち上がる。

「っ……フェデラ、なんじをつ、覆い隠せっ！」

「はい、残念」

藁人形に変化はない。　唱えた魔法は失敗だった。

魔法を唱えるのに必要なのは集中力と『呪文』の発音と言われている。　今回はどっちも足りなかったらしい。

ちなみにここでの『呪文』とは、今回の場合、『ヘデラ』、の部分だけを指す。　あとの部分は主に集中力を高める為の補助部分なので発音はそこまで重要じゃない。　また補助部分は唱える人によって異なることが多く、ある意味では『呪文』に何となくそれっぽい文章を付け足しているとも言える。　ただ千差万別の補助部分にも、ある程度の文法の制限があるらしくて、大体、我、だとか、汝、だとかのあとに命令系がくることが多い。

ついでに言うと、探索者は補助部分を唱えないと魔法が発動しないが、迷宮の怪物は何故か補助部分なしで魔法を唱えることが可能である。　つまり、怪物との魔法戦では、補助部分の詠唱時間探索者のほうが不利ってことになるな。

悔しそうな顔をしているエリーを横目に、オレは懐中時計をみる。少女のグループ「アマゾネス」が迷宮から戻ってくる前に、オレは退散することに決めていた。

退散せねばならない理由は二つある。

一つ、部外者なのに、余計な魔法や訓練法を教えている現状が後ろめたい。

二つ、そもそもオレは「アマゾネス」のリーダーにこっぴどく嫌われているらしい。

とりあえず、「アマゾネス」に歓迎されないことだけは確かだろう。ということで、「あと三セットな」とメニューを少女に与えて、撤退の準備をする。む、無理だよお、とか聞こえた気がしたが気のせいだろう。

などと考えていたら、

「あーっ！！ 《死神》がこんなところにいるよーっ！！ クーネさん、みてみてっ！！」

とデカイ声が辺り一体に響き渡った。しまった、撤退が遅過ぎたか、と思っても後の祭り。

「む、本当か！ どこにいる」

と黒髪の女が答え、

「そこだよっそこー！！」

と騒がしい女がオレを指差す。

オレのことを嫌っているらしい黒髪の女が、無言で近づいてきた。逃げられないそうにない。

どうしたものかな、と考えたが、近づいた黒髪の女はオレを無言

で見つめるだけ。しばらくして、フツ、と嘲笑したかと思うところ
言い放った。

「《死神》殿、模擬戦を申し込む。私の訓練に付き合ってください
ないだろうか」

すみません。 どういう流れなのか、全く読めません。

10 フードの下(前書き)

風邪で体調が優れないので、しばらく更新ペースは下がります

10 フードの下

よりにもよって、《死神》を見て父上のことを思い出してしまうなんて。

クーネは、訓練用の木刀を選びながら気持ちを整理していた。

不覚にも、《死神》の目が、父上の目と似ていると認識してしまつてから、私の中で言葉に出来ない気持ちが爆発しそうになっている。こんなこと、迷宮街に来て以来、いや故郷が滅ぼされて以来初めての経験だった。忘れていた記憶、強い父上への尊敬、男性のたくましさへの憧れ。男への嫌悪感と同時に存在してはいけない気持ちだが、《死神》によって掘り起こされようとしている。

でも、この立ち会で否定すればいいだけのこと

クーネの、父に対する最も強い記憶は、剣の立ち会いにおける圧倒的な強さだった。ゆえに《死神》に勝負を挑んだのも、《死神》が父とは異なることを確認したいがための行動であった。

《死神》が父上の様に強く優しい存在であつていいはずがない。《死神》を見て、湧き上がる感情が、尊敬や親愛といった類である、という疑念を払拭したい。

その為の、模擬戦。

私は武器の選択を終え、闘技場へと足を運ぶ。闘技場には、既

に「アマゾネス」のメンバーが集まっていた。

「頑張つて下さいねークーネさん!!」と、「アマゾネス」のムードメーカー、ライムが声援をおくる。相変わらず元気だな、と心の中で微笑む。

どうやら《死神》は武器の選定に手間取っている様で、なかなか闘技場に現れない。

ファラとシンディは、エリーを囲み、《死神》とエリーの関係について盛り上がっている。女三人で姦しいとは上手いことをいうものだと思う。

そして、そんな盛り上がりとは一線を隠す様に、一人ぽつんとカリナが闘技場の床に座り込んでいた。

勘の鋭い無口な私の親友、カリナは私の意図に気付いているのだろうか、と考える。私の視線に気付いたのか、あの子は軽く微笑んだ。まるで微笑ましいものを見るかのように。あの子は私の過去を知っている。私が男を極度に侮蔑していることを知っている。そして知っていながら、何も言わない。

《死神》を見たときに私が抱いた感情も、あの子にはお見通しなのかもしれない。

そして、それが望ましい変化だと考えているのかもしれない。

それでも。それでも私は、この感情を否定してみせる。

そうやって「アマゾネス」のメンバーを見ながら決意を新たにしていると、ようやく《死神》が武器選びを終えたようで、闘技場に

姿を現した。

「時間かけてすまん、長いのが見つからなくてな」

そう言う《死神》の手には長さ七尺ほどもある木刀があった。

私がつ持っている木刀のおよそ二倍の長さ。充分すぎるほど長いのに、《死神》は不満げにしている。

「しかし、本当にやるのか？ こんな棒つきれでも大怪我するかもしれんぞ」

《死神》は私に尋ねる。

「随分な自信だな」

「いや、女の子を痛めつけるのは好みじゃないというか……」

女の子、だと。

私は、《死神》を睨みつける。

私は、負けない。

「ああ……わかったよ。戦えばいいんだろ。……戦うときにこれは邪魔か……」

ぶつくさと言いながら、《死神》はローブについたフードを外す。

そこには透き通るような金色の髪。

美丈夫といって差し支えない顔立ち。

そして頭の側面に、骨まで達するかとも思われる深い傷があり、その周辺の細胞、毛根に至るまで死滅している。一目見て致命傷にも思えるグロテスクな傷跡が、全体の調和を著しく損なっていた。

10 フードの下(後書き)

金髪イケメン(ハゲ)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9037z/>

迷宮街の死神

2012年1月5日18時49分発行